

話者の見積もりを表す機能語

— 「わりに (は)」「にしては」に見られる話者の捉え方—

On the Compound Functional Words :

— The Grasp of Speaker in “warini(wa)” and “nishitewa”—

奥村大志

日本語コミュニケーション学科兼任講師

抄録：

ある表現を使うとき、話者がどのような見方、捉え方、把握のしかたをしているのかということ を明らかにする研究にはいろいろなものがある。特にその語句が直接に話者の見方を表すものではないタイプの一例として、「わりに (は)」「にしては」を取り上げる。それらの二つの違いについて考察しながら、それぞれの表現において話者がどのような見方しているのかということ を指摘する。

Summary :

There are many studies which deal with the grasp of speaker. But they mainly discuss “modality”. Indirect expressions such as “particle” particles, adverbs, and compound words have not been fully known because they are not only grammatical but semantic, and they have many words. Then this paper focuses on “warini(wa)” and “nishitewa”, and considers their difference. And it points out the grasp of speaker when they use these compound words.

キーワード：「わりに (は)」、 「にしては」、複合辞、機能語、予想、見方、比較

Key Words : “warini(wa)”, “nishitewa”, compound words, functional words, expectation, view, comparison

1. はじめに

我々が言葉を使って何かを表現するとき、そこに示されるものは客観的な内容だけではなく、話者が何をどのように見ているのかも同時に表現される。文法研究においてはその話者の見方・捉え方を表す形式としてモダリティを表す諸形式の研究が盛んに行われてきた。一方、それとは

違う流れの研究として、話者の見方が直接示されない形式の研究も行われてきている。取り立て研究はその代表的なものだろう。例えば、「しか(…ない)」を取り上げてみると、

(1) 太郎しか来ませんでした。

と言った場合、

(2) 〈太郎が来たこと〉 + 〈太郎以外の人が来なかったこと〉

を表している。文の中に明示的に示されているのは「太郎(が)来た」ということであり、(2)の後半の部分は、話者が「来てもよかったのではないか」と思っている人の集合を想定し、その太郎以外の人に来なかった事実を述べているわけである(想定+事実)。文には太郎以外の人について何も書かれていないのに、そのことについての情報を伝えているということで、取り立て助詞が話者の見方を表す形式として分析されてきたのである。

そして、意味研究で話者の見方・捉え方を明らかにしてきた研究の一つは副詞の分析であった。例えば「やはり」を見てみると、

(3) やはり彼は来ませんでした。

という文においては、

(4) 〈彼が来なかったこと〉 + 〈予想どおりになったこと〉

(〈彼が来ないと予想していたこと〉 + 〈実際来なかったこと〉)

ということが示されている。他に、例えば「てっきり」を見てみると、

(5) てっきり彼が犯人だと思っていました。

という文においては、

(6) 〈彼が犯人だと思っていたこと〉 + 〈予想が外れたこと〉

ということが示されている。

副詞の分析を通してわかることは、たった一語であっても、その一言の裏で働いている我々の見方・捉え方はかなり複雑なものがあるということである。そしてその語の意味を十全に把握するためには、その話者の捉え方といった部分に切り込まなければいけないという事は明らかである。

ただ、こうした形の研究では、話者の見方を総合的にまとめていく、ということになりにくいのが問題点として挙げられる。

文法研究は形を手掛かりにするのが常套手段である。したがって「かもしれない」「にちがいない」などの形が手掛かりになるモダリティ研究や「だけ」「ばかり」などの形が手掛かりになる取り立て研究などの場合、ある形を取り上げて集中的に考えることが可能であった。

それに比べると、副詞の場合は個別の問題であるので、それぞれの語の意味・用法を問うときに、それ固有の話者の見方・捉え方が問題にされるだけで、それらを総合する形で話者の捉え方の研究というものは行われてこなかった。ある語の分析で得られたその分析が他の語に適用しにくい以上、これも仕方がない面があると思われる。

しかし、分析対象が一定しないにせよ、個別的分析を進めていくべきであろう。研究は散発的なものにならざるを得ないという面があるとはいえ、ある程度の積み重ねができたときに、それ

をまとめれば見えてくるものもあるはずである。

我々の見方が反映するのは副詞のような語に限らない。いろいろなレベルで話者の見方・捉え方が言葉に入り込んでいるのだから、いろいろなレベルで分析が進められる必要がある。ここで取り上げようとするのは、機能語になった複合辞である。語の意味分析、助動詞的な文末表現などの分析に比べれば、扱われることが少なかったため、何をどのように見ているかというような角度からの研究はまだ少ないように思われる。

ここでは、具体的には「わりに(は)」「にしては」を取り上げ、類義形式であるといわれる二つの違いを考え、それを通してそれぞれの表現の表現をしたとき、どのような見方をしているのかを明らかにすることにしたい。

2. 従来の説の紹介

従来の研究において、意味の分析それ自体は、ある程度行われている。そしてその形式の特徴に関する主要な論点はある程度出されている。しかしこれは副詞研究をするときに、その語の概略が国語辞典に載っており、また、それを越える記述が類義語辞典や、基礎語を取り上げる辞典などで扱われているのと同様である。すなわちある程度の積み重ねがありながらも疑問点が残っていたり、なぜそうなのかということをはっきりと書いていなかったりするので、一歩進めて考える余地があり、さらに検討を深めて従来言われていたことに何かを付け加えることができるのではないかと思うわけである。さて、個々の検討の前にここで従来記述を見てみることにする。

まず、小学館辞典編集部〈編〉(2003)を見てみると、その違いについては、こうある(注1)。

- (7) 「にしては」は、「XにしてはY」の形で、Xという条件から見てYという結果は予想外で順当ではないことを表わす。「わりに(は)」は、「Xわりに(は)Y」の形で、Xの程度にYの程度が釣り合わないことを表わしている。この点だけで見れば、二つの表現にそれほど差はないが、「にしては」の場合、Yという結果を中心にして考えると、むしろXという条件がまちがいのないのではないか、という疑いがほのめかされることがある。つまり、Xから見るとYは順当ではない。だからむしろ、Yが事実とすれば、Xではないのかもしれない、という意識が「にしては」に生じることがある。

次に、白川〈監修〉(2001)を見てみると、その違いについては、「比較の表現」の項目でこのような記述がある(注2)。

- (8) 「PにしてはQ」は、「Pという前提から一般的に予想される基準・標準と比べるとQだ」という意味を表します。Pには(中略)名詞が来る場合と(中略)動詞が来る場合があります。(中略)Pはあくまで前提なので、現実には正しいかどうか不確定なときにも使うことができます。
- (9) 「Pわりに(は)Q」は、「Pの程度から一般的に予想される基準・標準と比べるとQだ」という意味を表します。Pには何らかの程度を表す表現が来ます。(中略)形容詞の他、尺度

や程度を表す名詞（中略）や程度副詞を伴う動詞（中略）の場合もあります。

(10) 「わりに（は）」と「にしては」は多くの場合互いに置き換えることができません。

(11) 次のように「PにしてはQ」「Pわりに（は）Q」が共に使える場合もあります。（中略）

「田中さんはお金持ち {にしては／のわりに} お金に細かい」（中略）（この場合は）Pがお金持ちという程度性を持つ名詞であるため両方可能になっています。

(12) 「年齢」のような尺度を表す名詞（その他「高さ」「広さ」「身長」「成績」など）の場合「にしては」は使えません。

さらに、田中（2010）を見てみると、その違いについては、こうある（注3）。

(13) 「わりに（は）」の意味と用法 逆接・対比表現の一つで「(A)の状態から常識的に予想される基準と比較して(B)はその基準に合わないで」という意味で用いられる。プラス評価でもマイナス評価でもよい。「割には」のようにハで強調されることが多い。副詞では「割と」「割りに」「割合」などがある。

(14) 「わりには」はしばしば「にしては」との言い換えが可能であるが、否定的な状況の場合適切さを欠く。

(15) 「にしては」では、「当該状態から社会通念的に想定される基準に照らして以下事態はその基準に合わない」という意味で、プラス評価でもマイナス評価でもよい。類義的な「割には」と比べてややフォーマルな感じがする。

さて、簡単にいくつかの疑問点を挙げておこう。まず、なぜ白川（監修）（2001）では比較、田中（2010）では逆接などのように扱いが分かれるのかという点が挙げられる。また、「わりに（は）」の場合、前の名詞が「年齢」であってもいいのに、「にしては」の前ではなぜ使えないのだろうか。この現象の指摘はされているが、それがなぜなのかという点については明らかになっていない。また、「わりに（は）」→「にしては」の言い換えは否定的な状況の場合適切さを欠くという（13）の指摘は本当だろうか。さらに（7）（9）（13）では触れられていないが、「わりに（は）」を使った文には、予想とは関係がなくなってしまったものがあり、その位置づけについては触れられていないのも疑問点の一つである。

3. 「わりに（は）」「にしては」の分析1

ここでは、（14）について検討する。否定的な状況というのが何を指すのかははっきりしないところもあるが、とりあえず田中（2010）の例文を見てみると（注4）、

（16）よく準備した割にはいい点数は取れなかった。＝田中（2010）の（209）a.

（17）よく準備しなかった割には良い点数が取れた。＝田中（2010）の（209）b.

と書いてあり、どうやらこれらの例文は「わりに（は）」が言えるのに対し、「にしては」に言い換えると適切さを欠く例らしい。（16）は主節が否定文、（17）では従属節が否定文であるので、そのような場合に言い換えが難しくなるという事のようなものである。

しかし、次のような文はどうか。

(18) 学生：でも、自分なりに必死に勉強したんです。

先生：ふーん。でも、猛勉強したにしては点数が伸びなかったな。

これが言えることから、後半が否定文の場合には適切さを欠くとは言えないと思われる。

また、テスト結果が出て、その結果を見て独り言をつぶやくような場面で、

(19) あまり勉強しなかったにしては、いい結果が出ているなあ。

と言えることから、前半が否定文の場合には適切さを欠くとは言えないと思われる。

さらに、否定文ではなく、否定的な内容、すなわちマイナスの内容ではどうかと言うと、

(20) 学生：でも、自分なりに必死に勉強したんです。

先生：ふーん。でも、猛勉強したにしてはできが悪かったな。

これが言えることから、後半が否定的な内容の場合には適切さを欠くとは言えないと思われる。

(21) いい加減にやったにしては、いい結果が出ているなあ。

これが言えることから、前半が否定的な内容の場合には適切さを欠くとは言えないと思われる。

まとめて言うと (14) は成り立っていないと結論できる。(16) (17) の「わりに(は)」を「にしては」に言い換えられなかったら、それは否定に責任があるのではなく、他の要素に責任があるのだと思われる。つまりどこか別の部分で文の自然さが損なわれているということであろう。

4. 「わりに(は)」「にしては」の分析2

ここでは、(12) について検討する。これが言っていることは、具体的に言うと、

(22) あの人、年のわりに若いわね。

(23) × あの人、年にしては若いわね。

(24) 値段のわりにおいしいなあ。

(25) × 値段にしてはおいしいなあ。

のように、「年」「値段」といった名詞は「にしては」の前で使えない、ということである。

しかし、年や値段について周りの人から聞かされて、驚いて発言する状況で

(26) その年にしては若いわね。

(27) その値段にしてはおいしいなあ。

のように「その」が付けば、自然な表現になってしまう。つまり、名詞自体が具体的な数字を感じさせるものでなくても、ある程度具体的な数字が想定されるようにすれば「にしては」が使えるのである。よって、尺度を表す名詞は「にしては」前に来ない、というように「名詞」の性質そのもので説明するやり方ではなく、「にしては」の前には、ある程度具体的な数字を示唆するものが来るというような言い方のほうがよいだろう。

「わりに(は)」は「にしては」と違って、「年」のような具体的な数字が決まらない語も前に取り得るし、「にしては」と同様に「その年」や「30歳」のような具体的な数字を示唆する語も前に取り得る。このことを

(28) 「わりに(は)」の前は、任意の値を表す語が来るが、「にして」の前には特定の値を表す語

が来る。

という言い方で表しておく。

なお、特定の値と言っても、

(29) あの年代(の人)にしては、言っていることが保守的だ。

と言えるので、数字そのものが定まるか否かは重要ではないことがわかる。つまりこのときの「特定」とは、点のようなものではなく、幅があってもよい。すなわち話者が指す対象が具体的に決まっていればよいということである。

5. 「わりに(は)」「にしては」の分析3

ここでは、「わりに(は)」について(7)や(9)で、前に来る語句が「程度」とあるが、それが妥当かどうかを検討し、それをきっかけに「わりに(は)」の分析を行う。

(7)では「『Xわりに(は)Y』の形で、Xの程度にYの程度が釣り合わないことを表わしている」とあり、また、(9)では「『Pわりに(は)Q』は、『Pの程度から一般的に予想される基準・標準と比べるとQだ』とあり、さらに「Pには何らかの程度を表す表現が来ます。」とある。これらの記述を見ると、前に来る語句が「程度」を表しているのだと言っているのだが果たしてそうだろうか。

本稿での結論は、「わりに(は)」の前の語句の「程度」が重要なのではなく、前の語句から予想した「程度」が重要なのだということである。

まず、(9)については前に来る語は「程度」と言っているが、(11)で前に来る語が「程度性を持つ名詞」だから「わりに(は)」「にしては」の両方が可能で、一方(12)で前に来る語が「尺度を表す名詞」なら「わりに(は)」は使えるが「にしては」は使えないというようなことを言っている。ここから、(9)で言う「程度」の中に(11)の「程度」や(12)の「尺度」が含まれることになり、「程度」が何を指すかまぎらわしい。こうなる原因は、前の語句に「程度」という語を使っているからであり、それはやめたほうがいいということである。

より重要な理由は、「わりに(は)」を使ったときの見方である。この言い方をしたときに、どこに目を付けているかということが肝要なのである。例えば、

(30) 安いわりにおいしい。

という例文を使って説明してみることにする。このような表現をした場合、「安い」という語句からおいしさの程度はこのくらいという予想をしておき、実際のおいしさの程度はそれとは違っているというようなことを述べているのである。つまり、重要なのは「安い」という程度(「高い」とか「安い」とかいう程度)ではなく、「安い」ことをもとに予想された程度のほうなのである。ここで特徴的なのは「安い」と「程度はこのくらい」という予想の関係は、「安い」が根拠で、予想が結果という関係になっているということである。前の語句「安い」が根拠になっていることを簡易的に「から」を使って表すと「安いからこのくらいではないかと思った」ということである。(30)の文での見方を細かく図式化して表すと以下ようになる(注5)。

(31) 「安い」(根拠) から このぐらいの程度を予想 (結論)

|違っている

しかし、実際にはこれぐらいの程度 (「おいしい」)

「予想」と「実際」を比べて、それに食い違いがあることを述べている表現なので、比較をしているのではあるが、それが前面には出ていない。これはおそらく「程度」を問題にしたところから来る性質のように思われる。「程度」といった以上、それは何らかのことについての「程度」であり、しかも「程度」を示しただけで、積極的に比較しなくても比較をしたことになる。他のもので例えて言えば、テストの点を問題にしているときに75点と90点という数字が示されれば、そこから改めて75点と90点を比較してどちらがどのくらい数値が大きいかということをお互いざざ比べないのと同じである。(そして、予想が75点で実際が90点であれば、「思ったよりできた」とか「意外に良かった」などというわけである。)

もう一つの例として(24)の例を挙げてみることにする。これを図式化して表すと、

(32) 「値段」(根拠) から 予想はこのぐらいの程度 (結論)

|違っている

しかし、実際にはこれぐらいの程度 (「おいしい」)

先の(31)の例は「わりに(は)」の前の語句が「安い」という形容詞、(32)の例は「わりに(は)」の前の語句が「値段」という名詞の例だが、同じ図式で捉えることができる(注6)。

ところで、(24)と(30)の例を並べてみると、これは

(33) 値段が安いわりに、おいしい。

のバリエーションなのではないかということに気がつく。(30)の「安い」は述語相当のものなので、それに対応する主語の部分の想定することはそれほど難しくはないが、(24)の「値段」が、述語相当の部分を省略したような表現になっていることに改めて注目しておきたい。このようなことは「から」の関係でつながっているときには起こり得ることである。

(34) 値段が安いわりに、おいしい。→ 値段のわりに、おいしい。

(35) 顔色が悪いから、病気だと判断した。→ 顔色から、病気だと判断した。

6. 「わりに(は)」「にしては」の分析4

ここでは、前項で検討した「わりに(は)」に対して、「にしては」はどのような見方をしているのかということについて分析する。

(7)や(8)では、それぞれ条件とか前提という言葉を使って「にしては」の特徴を説明しているかとしているが、この方向性に関しては正しいと思う。そこで、

(36) ひとりでやったにしてはよくできている。

という例文を例にして、同様にどのような見方をしているかを考えてみると、以下のようになる。

(37) ひとりでやった なら 普通はこうだ

↑

……………比較して良いとか悪いとかの評価

↓

現実はこうだ (「よくできている」)

「にしては」の特徴の一つは、予想をするのではあるが「わりに (は)」の場合に比べて、常識的にはこうだとか普通はこうだという通念を背景にしていることが多いのではないと思われることである。(37) ではそれを「普通は」という言葉で表しておいた。もちろん「わりに (は)」の場合であっても通念を背景にすることはあるのだが、それだけにとどまらず、自分がそう思うとか、時にはそうなったらいいなあとという願望込みで予想をするという傾きがある。

「わりに (は)」の前の部分が予想に対して「から」で繋がるような関係だったのに対し、「にしては」の場合は前の部分が予想に対して「なら」で繋がるような関係であることも特徴の一つである。「なら」の関係である事の一つの傍証は (7) (8) でそれぞれ、「(「X にしては Y」の形で) Y が事実とすれば、X ではないのかもしれない、という意識が『にしては』に生じることがある」とか、「(「P にしては Q」において) P はあくまで前提なので、現実には正しいかどうか不確定なときにも使うことができます」とか言っていた現象が「なら」の文でも同様に起こるといふ事実である。(7) (8) のような従来の指摘の例は、具体的には、

(38) 小学生にしてはうまい字だな。

という文において、

(39) 小学生は、普通はこのぐらいの字を書くものだが、実際にはこういう字が書かれていて考えてみると、その通常レベルと比べてうまい字を書くものと評価している。

という解釈も当然あり得るが、それとは別に、

(40) 小学生がこんなうまい字を書けるとは思えない。こういう字が書かれているのを見ると、実際に書いたのは小学生ではないのではないか。

という解釈もあることを指している (注7)。

これと同様の現象は「なら」でも起きる。(こういう用法があることは一般的に知られている。)

(41) 彼が犯人なら、1時にここに来ることはできない。

という文において、

(42) 仮に彼が犯人の場合、1時にここに来ることができないという事実を述べている。

という解釈も当然あり得るが、それとは別に、

(43) 彼が犯人とは思えない。1時にここに来ることができたのを見ると、彼は犯人ではないのではないか。

という解釈もあるのである。平行して同じような現象が起こるのは、「にしては」が「なら」と同様の部分を持っている証拠になる。

「わりに (は)」が「から」と関係があり、「にしては」が「なら」と関係があると考えると、見

かけ上の観察から得られた(28)の内容にも説明を与えることができる。(34)(35)で示したように、「わりに(は)」は「から」と同様に、述語部分を省略して、その主語の部分だけでも判断の根拠なり得るのに対して、「にしては」は「なら」と同様に予想が得られるための前提になっているものだから主語の部分だけではだめで、その具体的な内容を述べる述語部分が必要とされる。よって、「わりに(は)」の前には、述語で示されるような具体的内容が来てもいいし、主語で示されるような(数値が具体的に示されていない)内容が来てもいいのに対し、「にしては」の場合には、述語で示されるような具体的内容が来なくてはいけないというわけである。

(44) 年が30歳にしては若い。→ × 年にしては若い。

○ 30歳にしては若い。

(45) 年が30歳なら当分現役選手でいられる。→ × 年なら当分現役選手でいられる。

○ 30歳なら当分現役選手でいられる。

さて、次に指摘しておきたい点は「にしては」は「わりに(は)」に比べて、「普通はこうだ」という予想と、「現実はどうだ」というのを改めて比べてみて、「素晴らしい」とか「変だなあ」とか「困ったものだ」というような批評込みで述べる感じがするという所である。「わりに(は)」は予想と現実がある一つの程度スケールの上に乗っていたがゆえに、比べてはいてもそれが内在なものであったのと違い。二つの事態を並べてみて改めてその比較をするという見方をしているところから、その事をどう思っているかというニュアンスを感じさせることが多くなるということなのであろう。

7. 「わりに(は)」「にしては」の分析5

ここでは、「わりに(は)」には予想とまったく関係がなくなった単なる逆接の用法が見られることを述べ、その逆接的用法への移行について述べる。

「わりに(は)」の実例を見ていると、前のことから程度の予想をするという典型的な使い方以外の例を多く見かける。下にあげる例は、ある映画に出てきた台詞である(注8)。

(46) (ある女の子の動作を見て) かわいいわりにとろいのう。

このような例において話者には「かわいい」ということから何かの程度を予想し、それと現実が食い違っているというような意識はないであろう。このような例は実質的には、

(47) かわいいけど、とろい。

という表現と同様の役割を果たしているものと思われる。これを単純逆接的用法と呼んでおく。

このような単純逆接的用法はどのようにして生まれたのだろうか。おそらく典型的な用法と同様、最初は何らかの予想があったのであろう。

(48) 「かわいい」 から 他の美点が多いということを予想・期待する

| ………………違っている

しかし、そうでは無いところがあるのが現実(「とろい」)

「かわいい」という美点の一つから他の美点を予想するというのは、合理的な論理ではないが、一つのものを他にも及ぼそうとする拡張的推論（期待を込めた予想）を無意識にしているのであろう。いずれにしてもこの図式のときには元の図式を多く残している。しかし、予想や期待の部分が重要な要素ではないためにしだいに抜け落ちると、最終的に以下ようになる。

(49) かわいい

しかし、とろい。

こうなると単純な逆接と同じというわけである（注9）。

8. 「わりに(は)」「にしては」の分析6

最後に「わりに(は)」「にしては」の周辺的な形式として、「そのわりに」「それにしては」という接続詞について簡単に指摘しておきたい（注10）。

上の(13)では関連語句として「割と」「割りに」「割合」が挙げられていたが、単なる副詞としての「割に」の使い方は接続的な機能語として働く「わりに(は)」と違うところも多いので、参考にはならないことはないものの、同じようなものとして扱うわけにはいかない。これらの副詞より参考になりそうなのが文の冒頭で使われる「そのわりに」である。この使い方などを観察すると「思っていた程度と違う」という意味を強く感じるが、このようなことも「わりに(は)」の分析を補強する例として使えるのではないかと思う。同様に文の冒頭で使われる「それにしては」の場合には「変だなあ」とか「驚いたなあ」というニュアンスをより感じる。このようなことも「にしては」の分析を補強する例として使えるのではないかと思う。使い方が違う別の語句なので直接的な証拠と言うには弱いですが、補助的に使うとしたら接続詞としての「そのわりに」「それにしては」が一番だということだけ指摘しておきたい。

9. 最後に

「わりに(は)」「にしては」の違いを考えながら、それらの語句を使ったときに、話者が事態をどのように見ているかを考えてきた。どのような通念があり、それを踏まえて話者がどのような予想をしているかということは、個別の状況によるところがあるのでまとめて扱いにくいですが、複合辞による機能語には、予想を前提として使っている表現がまだ多くある。それらを積み重ねることによって、見方に関する研究が積み重なることを願ってやまない。

注

- 1 (7) は小学館辞典編集部〈編〉(2003)のp.1132より引用した。
- 2 (8)と(9)は白川〈監修〉(2001)のp.203、(10)~(12)は同書p.204より引用した。なお、(11)の「田中さんは…」の例文は二文だったものをまとめてあり、略した部分の内容を補うため「(この場合は)」という語句を加えてある。
- 3 (13)と(14)は田中(2010)のp.218、(15)は同書p.49より引用した。
- 4 (16)と(17)は田中(2010)のp.218より引用した。

- 5 「わりに(は)」「にしては」が、比較の項目で扱われたり、逆接の項で扱われたりと、その扱いがなぜ分かれるのかを本文で疑問点として挙げたが、以下の分析に見られるように、それぞれが複合的な面を持っている(二つの要素を比べて、違いがあると認識したり、評価を下したりするので比較の面もあり、また、予想どおりではないことを表す点で、逆接的な面も持っている)ので、これはしかたがないことである。
- 6 (31)の「から」は接続助詞であり、(32)の「から」は格助詞であるが、この違いはここでは問題にならない。ある判断が引き出されるときの根拠(一種の出発点)が「から」で表されていればそれでいいからである。
- 7 なお(7)では(「XにしてはY」の形で)Yが事実とすれば、Xではないのかもしれない、という意識が『にしては』に生じることがある」としていたが、「新入社員にしては社内の事情に詳しくない」という文では「新入社員ではないのではないかと」という結論が導出されるほか、「ただの新入社員ではない」というように(「新入社員である」ことが否定されるのではなく)、「単なる」とか「ただの」ということが否定されるような例があり得る。考えてみれば(40)の例も本文で挙げた解釈だけではなく「小学生だけで書いたのではなく、たとえば親が手伝ったとかそういうようなことをしたのではないか。」という解釈もありうる。このような例の指摘がされたのを見たことはなく、ここから推論のあり方の研究をするのは興味深いことのように思われるが、このことを追究していくと本稿の課題からは外れるため、指摘のみにとどめる。
- 8 敷村良子原作、磯村一路監督・脚本の映画『がんばっていきまっしょい』より。冒頭から30分ごろのシーンでボート部の先輩(男性)が後輩の女性を見て独り言をいう場面の台詞である。「わりに(は)」は話し言葉では(あるいは書き言葉であっても話しているような感じで書いてある場合には)、このような単純逆接的な用法が書き言葉の場合よりも多く見られる。なお、文末の「のう」は愛媛県で使われている終助詞であるらしい。
- 9 「わりに(は)」で単純逆接的用法の文に対する言及があまりないのでそれについて書いてみたということである。典型的な用法と逆接的用法の移行に関しては、帰納的な記述的研究ならば書かない内容であるが、本稿が見方・捉え方に関わる研究であるために書いた部分である。
- 10 帰納的な記述的研究ならば、形や使い方が違うものを参考には抑制的になる必要があると思うが、見方・捉え方に関わる研究の場合には周辺の事象を何らかの手掛かりにすることも有効だと思う。

補注

- 1 (10)では「わりに(は)」と「にしては」は多くの場合互いに置き換えることができないとあり、他の文献では二つの形を類義形式扱いしている。この食い違いは、最初は矛盾かと思ったが、(10)は単にそのままの形では置き換えることができないという意味であって、二つの形が全く重ならないなどを言っているつもりはないのだろうと思う。
- 2 引用した文献の表記がまちまちであったりするが(例:「割に」と「割りに」など)、引用に関わる所に関しては、表記を統一しないことにする。

参考文献

- 小学館辞典編集部〈編〉(2003)『使い方の分かる類語例解辞典 新装版』小学館
- 白川博之〈監修〉庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘〈著〉(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 田中 寛(2010)『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房

